

William Goldingの*The Spire*における読み手の自負と偏見¹ (Pride and Prejudice of Readers in and of William Golding's *The Spire*)

宮 原 一 成

*The Spire*はWilliam Goldingの作家人生前半期の掉尾を飾る重要な作品で、完成に約5年を要した後、1964年に発表された。これは中世イングランド南部の聖堂を舞台とした小説で、主人公は聖堂参事会長Jocelin主席司祭である。Jocelinは神に授けられた幻視 (vision) に従って、聖堂の屋根の上に高さ400フィートもの石の尖塔を新たに建築しはじめる。尖塔は高さを増すごとに、みずからの重量に堪えきれず徐々に傾ぎ出す。また、工事は金銭的費用のみならず人的犠牲も強いてくる。軟弱な泥しかない地盤を固めるための呪術的儀礼として、堂守Pangallは異教徒の職人たちから人柱にされて埋められる。Jocelinが“my daughter in God”と呼んで愛してやまないGoodyは、Pangallの妻であるにもかかわらず、尖塔工事の現場責任者であるRoger Masonとの不倫の子を宿したのち産褥死する。Rogerは酒浸りになり、しまいには職場放棄して逃走、職人人生を絶たれ、捨て鉢になって自殺を企てる。Jocelinはこれらの犠牲から目を背け、ひたすら建設に邁進するが、葛藤に苛まれるなかで、彼もまた心と体をむしばまれていく。異教徒を工事にあたらせているというAnselm神父の内部告発により、Jocelinはローマ教皇の使者から参事会長の地位を剥奪され、民衆からも嘲罵を浴びせられるようになる。しかも、自身は気づいていないものの、Jocelinは脊椎の結核に罹患しており、急速に憔悴し死に近づいていく。小説内では、こうした複数のプロセスが、迫力ある筆致のなかで絡み合わされている。

*The Spire*については、これまでいくつかの有力な読みが提示されている。*The Spire*出版後まもなくSamuel Hynesは、この小説をヴィジョン及び見ること全般についての本だと読み、そのヴィジョンの意味が徐々に現出していくプロセスが書かれている、と看破した (Hynes 43)。Leighton HodsonやHoward S. Babb、Arnold Johnstonといった批評家たちは、「自己理解の物語」と読んだ (Hodson 89; Babb 139; Johnston 69)。また、

*The Spire*は小説を書くという行為についての本だ、という寓話的な定義をする一派もあり (Kinkead-Weekes and Gregor 191; Hynes 46; Johnston 68-71; Crawford 115-16)、その読みはGolding自身によっても実践されている (Golding, “Moving” 166)。

諸家の解釈、とりわけHynesの読みはまさに妥当なもので、実際この小説には「見る」という行為の描写が頻出する。だが*The Spire*のなかには、ただヴィジョンや像を見る行為ばかりではなく、見る行為の発展形としての「文字を読み取る」「解釈する」行為や能力に関する言及も、相当数見られる。「書く行為」といえば表裏一体である「読む行為」も、*The Spire*の重要なモチーフなのだ。舞台となっている聖堂自体が、“the bible in stone” (Golding, *Spire* 51) や “a richly written book” (192) というふうな「読まれるべき存在」と表現されている点にはじまり、工事のための材木を寄進した功績によって聖堂参事会員に取り立てられた粗野な平民のIvoが、じつはラテン語聖書を一句も読めないことが仄めかされる小逸話 (71-72)、さらにはIvoだけでなくJocelin自身もまた、参事会長に就任した当時は “you could hardly read Our Father” (201) だったのではないかとAnselmになじられる場面にいるまで、「読み」に関する言及はさまざまな形で散見される。

本稿は、*The Spire*に「読むことについての本」という新しい定義を与え、その上で、*The Spire*という小説の内部と外部の両方に見られる「読み」の行為に着目して、作品を再鑑賞することを試みる。それは結果として、自己理解の物語という側面を拡充することにもなるだろう。

「読み」に関する言及が散在していると書いたが、当然のことながら、もっとも頻出するのは、当の主人公であるJocelinが行う「読み」行為である。2、3例を挙げよう。まず第1章には、堂守のPangallがJocelinに、軟弱な地盤の上に尖塔を増築する無謀さを、仏頂面で訴える場面がある。このときJocelinは、面と向かっているPangallの心中を、あたかも書かれた文字を読みとるように感知する—— “as he looked at the man eye to eye, the irritation came back in a sudden flurry. For he saw he saw the words in Pangall’s head, as clearly as if they had been written there; *because there are no foundations, and Jocelin’s Folly will fall before they fix the cross on the top*” (20)。単に表情を見るのではなく、書かれた文字を読みとる行為として描かれている点が私たちの注意を引くだろう。Pangallに関しては後にも同様の場面がある—— “in the air between

them [Jocelin and Pangall], hung the words unspoken: and neither will they [the workmen] be able to do it, no one can do it. Because of the mud and the floods and the raft and the height and the thin pillars. It is impossible” (61)。やはり、尖塔建築を愚挙だと考えるPangallの無言の抗議を、Jocelinが文字として読みとっている。

さらに第2章でJocelinは、今度は聖具保管役の要職にあるAnselmと対峙する。Anselmは30有余年來の旧友で修道院時代の先輩でもあるのだが、彼も尖塔建設には反対だ。Jocelinは異を唱え続けるAnselmにいらだち、参事会長としての地位をかさに着て、Anselmに上長命令を発して反論を押しさえ込む。やがて後悔に駆られ前言撤回を申し出るが、Anselmは態度を硬直し、命令撤回を正式な文書にするよう、杓子定規な要望を出す。Anselmは参事会の法規文をわざとらしく諷んじてみせる——“*When it is ordained that a matter shall be so decided between two of the four Principal Persons, let it be written—As if the statute hung there legibly in the air between them, Anselm clinched the matter by quoting from it. ‘What has been written, if there is a change, let that also be written’*” (49)。ここで、JocelinがPangallに対面した場面と同じ“hung [. . .] in the air between them”というフレーズが使用されている点が、2つの場面の共通性を演出している。Jocelinは、相手との間の空中に引っかかっている“legible”な語として、敵対者の心を読みとる。

心を「読む」と言っても、Jocelinが読むことができるのは、尖塔建設に直接的に関与する者たちの心だけである。Jocelinは、こういった者たちの心なら、完璧に読み取る能力が自分にはあると確信している——“*My place, my house [i.e., the cathedral], my people. [. . .] I know them all, know what they are doing and will do, know what they have done*” (8)。この確信は、自分が神に選ばれ神から啓示を受けた特別な高次の存在だという自負——“*They don’t know, he thought, they can’t know until I tell them of my vision!*” (8) ——から生じている。

一方、Jocelinには、尖塔に関わりの薄い人間の心は読めない。これは彼の偏見のせいである。そもそも、そういう連中の心などいちいち読むに値しない、と決め込んでいた。聖堂内の礼拝堂付き司祭であるAdam神父に対する態度が好例である。Adamはおそらく聖堂参事会員ではなく、尖塔建設についての発言権を持っていない。そのため、JocelinはAdamの顔から何の言葉も読み取ることがない。Jocelinの目には、Adamの顔のはのつべりし

た洗濯物干しピンの先端としか映らない——“he has no face at all. He is the same all round like the top of a clothespeg” (26)。Adamのケースと、PangallやAnselmのケースを比較すればわかるとおり、Jocelinの読み行為には高慢と偏見によるバイアスがかかっているのである。

小説のはじまりの部分において、Jocelinの読みの視野は極度に狭い。この時点のJocelinは、いわば「拙い読み手」である。だが、第10章にくると、Jocelinの読みの能力に劇的な変化が訪れる。一連の屈辱の体験を経たおかげと、また、彼に対するAdamの態度が一変することにより、Jocelinはそれまで歯牙にもかけなかったAdamの顔の上に、文字を認識するのである。

Father Adam raised his head. He smiled. Jocelin saw at once how mistaken they were who thought of him as faceless. It was just that what was written there, had been written small in a delicate calligraphy that might easily be overlooked unless one engaged oneself to it deliberately, or looked perforce, as a sick man must look from his bed.

He cried out to the face before he knew he was going to.

“Help me!” (196)

同情と理解を示してくれるAdamの前で、Jocelinは我知らずのうちに謙虚さを獲得し、その結果、それまで気づかなかったAdamの顔の文字を読めるようになる。

Jocelinの「読解力」は、彼の自負と偏見の程度を表示する物差しである。高慢であるうちは、尖塔に関わる事柄（たいていの場合、それは反対者という形をとって顕現するのだが）しか読みとることができない。謙遜を身につけ偏見をなくしはじめると、Jocelinの読解の視野は尖塔建設という焦点の外側へと大きく拡がり、もっと人間的な意味で重要なものをも、取り込めるようになる。

小説に登場する「読み手」はJocelinだけではない。Jocelinに読まれる存在だったAdamもまた、「読み」を実践する登場人物である。実際、Jocelinとともに作品に導入された「拙い読み手」というモチーフをフル稼働させるのは、このAdamなのである。

Adamは、Rogerに次いでJocelinと一緒にいることが多い作中人物で、それだけに、Jocelinのことを間近で観察できる機会に恵まれている。Adamは、私たち読者と似た立ち位置をとり、小説中Jocelinのさまざまな行動に立ち

会う。工事現場にまでついていくことはなかったが、それでも、ローマからの使者団によるJocelinの裁判にも臨席するし、民衆の暴行にあったJocelinを救出したのもAdamである。そして、病の床についたJocelinを看護し、病床にやってきたJocelinの叔母AlisonやAnselmとの会話にもつきそっている。Jocelinの臨終に際して終油の秘蹟を執り行うのもAdamだ。冒頭で紹介したように、この小説はJocelinの自己理解のプロセスを描くものと読める。だとすればJocelinの自己理解の精度と深度を外から計測する視点として、小説の読者にとってのAdamの存在意義は決して小さくないはずだ。

そのAdamは「読み手」でもある。Adamは礼拝堂付き司祭ではあるが、主席司祭たるJocelinの秘書的な役割も担っているらしく、Jocelin宛の公的書簡にも私信にも目を通せる立場にある。Adamがはじめて小説に登場するとき、彼はJocelin宛てに届いた手紙を携えている。差出人は、先王の愛妾だったAlisonで、彼女はJocelinの叔母である。JocelinはAdamに手紙を音読させ、Adamは、Alison本人（と代書役のGodfrey）と受取人Jocelin以外は本来知りようもない手紙の内容を、一言一句正確に知ることになる。第2章でもAdamはJocelin宛ての手紙を持ってくる。今回はAlisonからではなくWalter司教からの書簡である。このときAdamはJocelinに向かって“*I thought you would wish to read it at once*” (46) と前置きしている。これは、AdamがJocelinよりも先に手紙の封を切り、中身を読むことが許されていた、ということを物語る。このようにAdamは、読む行為を通してJocelinの置かれている状況や心中を知る機会を数多く与えられている。

さらに重要なAdamの読み行為が、第10章に描かれている。Jocelinが尖塔建設を着想するに至った経緯と当初の真意を、Adamが知る場面である。

教皇の使者から参事会長職を剥奪されたJocelinは、Adamの監視のもと役宅に謹慎するよう命じられ、床につく。監視兼看護役のAdamはここで、Jocelinが尖塔建築の幻視を授かった様子を記録したJocelinの手稿を読むことになる。これは、尖塔落成のあかつきにJocelinが説教壇から読み上げるつもりになっていた原稿である。

この原稿を目にするまでは、Adamもまた他の者たちと同様に、尖塔建設はJocelinの自己顕示欲と権勢の愚かしい誇示に過ぎないと感じていた。ところがJocelinの手書き原稿を読むことにより、Adamは自分の判断が誤っていたことを知らされる。尖塔建設計画は、“*unworthy servant*” (194) として神から真正な啓示を授かったと純粹に信じたJocelinの、邪心無き一意専心に由来していた。Adamたちの推測に反して、尖塔計画には、少なくとも

も最初の段階においては、なんら下劣な要素は無かったのである。² Adamは驚愕する——“But was this all?”(194)。そして心を揺さぶられたAdamは、しばし顔を両手で覆って全身をふるわせながら、“God have mercy on us all!”(196)と祈りをつぶやいた後、Jocelinのほうに向き直って笑顔を見せる。以後AdamはJocelinに対する考えを改め、大いに思いやりを示すようになる。前述のように、これがJocelinの「読解力」向上の契機となったのだった。

このようにAdamは、手紙や私的な文書を読むことによって、隠されていた文脈と、Jocelinの胸のうちに取められていた内奥の考えを、少しずつ発見する。³ Adamがこれらを発見するペースが、そのまま、この小説を読む私たち読者の発見のペースである。私たち読者も、Jocelinの説教原稿を目にするまでは、この尖塔建設計画の裏には、自らの権勢を誇りたいというJocelin個人の世俗的な欲望が潜んでいると思っていた。AdamがJocelinの手稿を音読してくれたおかげで、私たちもAdamと同時にJocelinの真実に気づくのである。いわばAdamは私たち読者を導く案内人のような読み手であり、Adamの読む行為は私たちにJocelinの秘密を啓いてくれる。

だが、問題点がある。私たちがこの案内役の「読み手」を、完全には信用できないという点である。Adamは「信頼できない語り手」ならぬ「信頼できない読み手」なのだ。Adamもまた、Jocelinと同じく視野が限られた「拙い読み手」である。そしてその視野狭窄の原因も、Jocelinのケースと同じ、自負と偏見なのである。

Adamの自負と根深い偏見は、中世カトリック教会の教条を絶対視し、盲信するところから生じている。このことは、たとえば彼の女性蔑視の姿勢に顕著である。

第1章末尾で、AdamがAlisonからの手紙を朗読し終えた後、Jocelinは女性全般に対するコメントを求める。答えてAdamは、“They have been called dangerous and incomprehensible, my Lord”(29)と発言している。Alisonの手紙の内容は、Jocelinが無心してくる尖塔建築費への寄付金とひきかえに、自分の墓を聖堂内の特権的な位置に確保してくれという凶々しい要求だったから、Adamがこういう応答をするのも無理もないところはある。

しかし、これを第10章のある場面と比較してみよう。謹慎処分中で床に伏せているJocelinを、Alisonが唯一の身内として見舞いに来る。ここでJocelinに邪険な扱いをされたAlisonは痲癩を起こし、意返返しとして、Jocelinが異例の出世で参事会長になれたのは、自分の巧みな淫戯に対する王からのご

褒美がわりだったのだ、というスキャンダラスな事実をすっぱ抜く。これは確かに、聖職者に嫌悪感を抱かせるに十分な態度ではある。だが同時に彼女は、肉親として心からの情愛をJocelinに注いでいる。聖堂内に墓を用意する話のためにここへ来たのかと問いかけるJocelinに、Alisonは“*No indeed! Don't think of them!*” (183) と言下に否定する。甥の容態を案じ、疲弊しきった姿に驚嘆し、口づけをした後そっと手を握ってやり、いくら神父が女色を避けるべき身だとはいってもせめてこれくらいの世話はしたいと言いながら、親身になって頬を優しくぬぐってやる。JocelinはAlisonの情愛に戸惑いながらも礼を言う。一方、Adamの女性嫌いは揺るがない。AdamはJocelinの監視役として、このやりとりの間ずっと同じ部屋で眺めていた。それにもかかわらず、Alisonが去った後にJocelinから意見を求められると、Adamは次のように答えるのみである——“*Her feet go down to hell*” (187)。Alisonが示す肉親の情を見た直後だというのに、Adamのこの返答に見られる女性蔑視は、第1章末尾と本質的にまったく変わっていない。Adamは、中世カトリック的女性嫌悪を金科玉条として後生大事にしているのである。

Adamの言葉は、旧約聖書箴言第5章第5節“*Her feet go down to death; her steps take hold on hell*”の変形で、これは遊女に惑わされることへの警告文とされる。⁴その後もAdamはAlisonのような女性たちについて、“*It were better a millstone were tied about their necks*” (195) と、これまた聖句（新約聖書マタイ伝福音書第18章第6節他）を引き合いに出しつつ、苦々しく吐き捨てる。このようにことさら聖句を口にするところは、Adamの女性蔑視が中世教会の教えによって強固に支えられたものであることを物語る。

だが、Adamのこうした聖句引用は、むしろ皮肉に働く。なぜなら、Jocelinの頬をぬぐうAlisonの行為もまた、聖書のある挿話を下敷きにしたものと考えられるからである。ルカ伝福音書第7章第36-50節の「罪深き女に香油を塗られるイエス」において、イエスは娼婦が自分に近づき足を髪でぬぐうのを拒まないばかりか、敬愛の口づけまで受け入れる。それを見たファリサイ派のシモンはあきれ果て、イエスの預言者としての資質を疑問視するが、イエスは女の真心を汲み、女に赦しを与える。福音書においてシモンの姿勢はイエスとの対比において非難されているわけだが、王妾だったAlisonがJocelinの顔をぬぐう場面では、敬虔なキリスト者を自負するAdamが、恥ずべきシモンの役回りを担っている。このように、Adamを「論語読みの論語知らず」として描き出しているところを見ても、GoldingがAdamの偏

狭さを批判的するスタンスをとっているのは明らかだろう。

救済という概念に関しても、Adamは教条にとらわれた狭量ぶりを見せる。それは、第10章以来、彼がJocelinに対して思いやりの感情を抱くようになった後でも、依然として変わらない。第11章でJocelinは自分の傲岸さをAnselmに詫び、和解を図るが、Anselmは相変わらず冷やかな態度を崩さず去っていく。悲嘆に暮れるJocelinは、そばに控えているAdamを頼る――

“Help me, Father!”

Then Father Adam came close and began to unravel things. He pulled and unravelled but got nowhere because all things were so mixed and the evil plant grew among and over them all. [. . .] Nor did Father Adam understand how necessary it was to have forgiveness from those who were not christian souls; nor how for that it was necessary to understand them; nor how impossible understanding them was. (203)

先に見たAdamの顔に微細な文字を読みとった場面のとくと同じように、JocelinはAdamに向けて“Help me”と呼びかけ、救いを求めている。だが、今回もまた、Adamは役に立ってくれない。なぜなら、このときすでにJocelinのほうは、中世カトリシズムの枠を踏み越えたヴィジョンに向かって歩みを進めていたからだ。ほどなくしてJocelinは、“*How proud their hope of hell is.* [. . .] Heaven and hell and purgatory are small and bright as a jewel in someone’s pocket only to be taken out and worn on feast days. [. . .] And what is heaven to me unless I go in holding him by one hand and her by the other?” (222) という悟りに至る。異教の地母神への生け贄に供されたPangallもしくは自殺を試みた異教徒のRogerと、そしてキリスト教道徳からすれば罪深い姦通者であるGoodyと、一緒に連れだつて入ることのできる天国でなければ、天国など何の意味もないとJocelinは知るのである。一方、善意の人ではあるが固陋な聖職者Adamには、非キリスト者であるRogerたちをも理解し、彼らからも赦しを受けることの切実な必要性は、決して理解できない。Jocelinに救いを求められても、せいぜいAdamにできるのは、カトリックとしての正しい祈り方の手ほどきを、“the lowest level”から教科書的におさらいしてやる程度のことでしかない(197)。この圧倒的なまでに太平楽なAdamの無力さは、Goldingの処女作*Lord of the Flies*の結末において、無人島に漂着した少年たちを救出にやって来た海

軍士官が、島で繰り広げられた地獄図の凄惨さと主人公Ralphの悟りをまったく洞察できないままにいる、あの無理解ぶりにも匹敵する。

こうしたAdamの限界を考えると、小説結末で描かれる「読み」行為の場面にも、きわめて皮肉な意味がこめられていると見なすべきだろう。結末においてJocelinは衰弱死を迎えるが、絶命の瞬間に、自分が見た神秘的な林檎の木やカワセミのヴィジョンを何とか言葉にして残そうともがく。その唇の震えをAdamは読み違える。

What is terror and joy, how should they be mixed, why are they the same, the flashing, the flying through the panicshot darkness like a bluebird over water—

“A gesture of assent?”

In the tide, flying like a bluebird, struggling, shouting, screaming to leave behind the words of magic and incomprehension—

It's like the appletree!

Father Adam, leaning down, could hear nothing. But he saw a tremor of the lips that might be interpreted as a cry of: *God! God! God!* So of the charity to which he had access, he laid the Host on the dead man's tongue. (223, 空白行は原文のまま)

臨終の床に横たわるJocelinは、おそらく中世カトリックの教義が解明する言葉を持たないような、神秘と不可知の領域にすでに入り込んでいる。尖塔のヴィジョンを得た当時のJocelinは、純心ではあったけれども、キリスト教の教義にどっぷりついていた状態だった。そのまま彼は徐々に自負と偏見を身につけてしまったのだが、臨終間近のJocelinの心は、もはや一宗教にのみ通用するだけの教条とは違う次元——“a different and altogether deeper level than an abstract creedal statement like ‘I believe in one God’” (Kinkead-Weekes and Gregor 199)——にある。しかし他方Adamは、この期に及んでもなお、秘蹟を形式どおりに執り行うことが“help you into heaven” (Golding, *Spire* 222) すると信じて疑わない。

間近でJocelinの行動を観察し続け、そしてJocelinに関係する文書を独占的に読むという特権を有しているながら、Adamは最後の最後にもJocelinを理解し損ねた。Adamにとって、ある意味でJocelinは、読むべきテキストそのものでもあり、また同時に、読むべきテキストの著者でもある。「読み手」Adamは、このテキストに対して、自分の宗教的バイアスをそのまま持ち込

んで、恣意的な読みを行う。上で見た小説の結末部は、読者と作者の関係を皮肉に描いたタブローだと見ることができるだろう。自己主張の強い読者が、“dead man”と宣告された作者を見下ろしているという図は、Roland Barthes的「作者の死」の概念を時代的に少々先取りした戯画と読むことも可能だ。

すでに見たように、JocelinはAdamを生命のない道具——「洗濯物干しピン」——として扱う見方を改め、思考や感情を備えた人間だととらえ直した。Jocelinは、Adamの内的精神活動を、“a delicate calligraphy”となって顔に浮かぶテキストとして認識できるようになったのである。そしてその次に、いよいよ臨終が迫ったとき、Jocelinはその認識をも踏み越えていく。Jocelinは、カトリックの狭い教義に囚われているAdamをテキストとして読むことを止める。Adamの顔に「微細な書法で書かれたテキスト」として浮かんでいた教条には、読む価値がないと見切るのである。そうなると、Adamの高慢と偏見の源泉であった宗教的学識のテキストは、透明になって消えていく。

[. . . Jocelin] looked at Father Adam with mild interest; [. . .] he saw what an extraordinary creature Father Adam was, covered in parchment from head to foot, parchment stretched or tucked in, with curious hairs on top and a mad structure of bones to keep it apart. Immediately, as in a dream that came between him and the face, he saw all people naked, creatures of light brown parchment, which bound in their pipes or struts. (222)

Jocelinは、人間存在自体を神秘や驚異としてそのまま受けとっている。人体を覆う皮膚である「羊皮紙」には、元来にも書き込まれていないものだ、という根源的な認識に、彼は至っている。

こうしたJocelinの認識の深化とはまったく対照的に、Adam本人は変化しない。いったんはJocelinから人間として見直されたAdamだが、じつは彼は、中世教会システムの歯車の1つとして盲目的に義務を遂行する機械的な道具のままである。私たち小説の読者にとっての案内人である「読み手」Adamは、小説の終結という土壇場で主人公Jocelinを読み損ねる。その読み損ないの原因は、Adamが自らの宗教知識について抱いているナイーブな自負のせいであり、彼の固陋な宗教的偏見のせいなのである。

ここで私たち自身の読み行為に目を向けよう。当たり前のことではあるが、

私たち読者は、小説作品の世界の外に位置しており、それゆえ、Adamが最後にJocelinの唇を読む行為も、外部者の目で観察し、Adamが読み損ねていることを読みとることができる。しかし私たちは自問しなければならない。私たちは、読みの能力において、常にAdamより明確に勝っていると言い切れるだろうか？ たとえば、尖塔建設を計画した当初のJocelinの意図には、邪な私心など含まれていなかったという事実を、私たちはAdamより先に知ただろうか？ 私たちがこれを知ったのは、Adamの音読と同時だった。そしてこの事実を、Adamと同様私たち読者の大半も、驚きをもって受けとめたはずだ。私たちは、自分で思っているほど、優秀な読者ではないのである。

ところが、この小説は、特にその最初の数章においては、私たち読者が、自分は優れた読者であるという自負を抱くように誘導する。第1章のはじめの部分は、得意満面で宗教的に高揚したJocelinの姿を描いている。高らかに“joy” (7) と“holy mirth” (8) を表現する笑い声をあげながら、Jocelinは視界に入ってくる人間に、次々と慈愛をこめた視線を送る。しかし、ある程度の経験を積んだ読者なら、主人公がこれほど極度に無邪気な自己満悦ぶりを見せているからには、この後彼に関する何らかの恥ずべき汚点が曝かれるという展開が待ち受けているにちがいない、と予測するだろう。実際、目利きの読者であるS. J. BoydやVirginia Tigerは、笑うJocelinの顔に、参事会室のステンドグラスから差し込む陽光があたって、アブラハムとイサクの凶像を投影している点を手掛かりとし、この後には悲劇的な人間的犠牲の物語が展開されるはずだ、と正しい予測をしている (Boyd 84; Tiger *Dark Field* 178)。

また、たいていの読者は、聖堂の建築模型が“a man lying on his back” (Golding, *Spire* 8) に喩えられたとき、尖塔の模型に男根のイメージが付けられていることを、読み落とすことはないだろう。工事が始まった聖堂内で、陽光のなかを漂う塵埃や建築資材の山積ぶりを見て、ここが“some sort of pagan temple” (10) と化したかのような印象をJocelinが抱く場面は、聖堂を汚す要素がすでにして忍び込んでいるという読みへと私たちを誘い込む。2人の助祭が、“proud” で“ignorant” で自分を“a saint” だと思い込んでいる人物の悪口をささやくのをJocelinが聞きとがめる場面では (13)、小説の読者は、Jocelinこそが噂の人物だ、と過つことなく読みとり、それに気づかないJocelinの浅薄さを嗤う。Jocelinが自らの読解力を誇るのを読み、それが虚栄であることを見透かして嗤うのである。

ポイントは、これらの「隠された」事実が正しく読者に伝わるかどうかで

はない。重要なのは、これらを大半の読者がほぼ確実に読みとった結果、自分の鋭敏な読解力に自信と自負を持ってしまう、という点である。この自負が、読者の読み行為にバイアスをかける。小説を読んでいる途中、しばしば読者はJocelinのことを、周囲のことも自分のこともまったく見えてない夜郎自大の司祭として捉えるよう方向づけられる。読者は、テキストから汚点の暗示をいくつも読みとり、いよいよJocelinの虚栄を確信する。読者はその確信に励まされ、また別の汚点の暗示を探し出す読みに乗り出す。

小説のテキストは、汚点や醜聞を含んだ「謎」を読者の前に次々と繰り出す。Pangallの不可解な出奔（じつは生き埋め）やJocelinの背中に宿る不思議な暖かい天使（じつは結核性脊椎炎）、生ぬるい沼でのたうつ悪夢（じつは夢精）など、書き方が迂言的ですがすぐには理解しづらい描写を並べてくる。これも読者の眼力についての自負と偏見を助長する。読者の読みは一定方向に偏向され、私たち読者は、聖なるものの描写を見かけると、その裏に暗く穢れたイメージが潜んでいはいないかと、その探査にばかり気持ちが向いてしまう。

ところがその読みは、私たちが小説のテーマに近づけるどころか、むしろ遠ざけるのである。JohnstonやKinkead-Weekesら多くの批評家が指摘しているとおり、*The Spire*において展開されているGoldingの哲学とは、正反対の二極にあるものがじつは分離不可分なのだ、というヴィジョンである（Johnston 80; Kinkead-Weekes 79; Hallissy 330）。不浄な塵埃と神聖な光明、邪教とキリスト教、世俗的肉欲と崇高な愛、罪と無垢、こうした種々の対立する両極構図が、“a suspension of perpetually interfused antinomies”（Tiger, *Unmoved* 166）のなかで渾然一体となって交わり合うことこそ、じつは世界の真のありようだというのだ。この認識こそ、末期のJocelinを訪れた林檎の木のヴィジョンが伝えんとする意味だった。

そうであれば、作品にとって肝心かなめのこの渾然混交のヴィジョンは、じつは小説の第1章においてすでに提示されていたことになる。尖塔に潜む男根のイメージや、光のなかで漂う塵埃が聖堂内に醸し出す異教の寺院のイメージなどは、秘めた汚点ではなく、混交のヴィジョンの予示だったのだ。第1章末尾で、Adamが読み上げるAlisonの手紙に書かれた世俗的な欲望の言葉と、聖母礼拝堂から漏れ聞こえる早禱のニケア信経の言葉が交差して聞こえる場面も、同様に読むべきだった。これは、Jocelin臨終の場面との見事な対照において、読まれるべきなのである。最終章において、別次元の悟りを模索するJocelinの心中の言葉に、Adamが聖なる終油の秘蹟を行う典礼の形式的文句がまわりつき、その結果、後者の権威の絶対性が否定され

ていく。それと同じことが、じつは第1章末尾においてももう起こっていたのだ。Alisonの煩惱まみれの手紙とニケア信経、この2つのテキストを対照的に絡ませる書き方は、下卑たAlisonの財布から出る金が尖塔を支えているという汚点を際立たせる手法ではなく、むしろまさに聖俗混交のヴィジョンの提示だったのである。

しかし、私たち読者の大半は、この混交のヴィジョンを初見で読み解くことはできなかった。初回の読書の途中では、私たちは小説から穢れの要素を見つけ出す作業に勤しんでいたからだ。そして、こうしたあら探しの読書が誤りだったということが、小説の最後になって、もしくは再読したときになって、はじめて読者に認識される。この小説はそう設計されている。

私たちが小説を読んでいる最中、私たちはAdamと同様の、視野狭窄の「拙い読み手」なのである。その視野狭窄の原因も、私たちを先導する読み手Adamと同じだ。Adamも私たちも、キリスト教的な意味で神聖であるふうに描かれているものには、全体的な善のイメージを付与したがる傾向をもち、Jocelinは下劣な人間であると決めつけながらJocelinを読む。そして私たちは、そうした読みの偏向のせいで、作品の究極的ヴィジョンの予兆を読みとり損ねる。

小説の後半、特に結末を読むとき、私たちはJocelinがスピリチュアルな成長をとげ超越的な高みへと歩を進めるのを見て、不意を突かれる。そして私たちはJocelinに関する偏見と誤解を翻然と振り捨て、すんでのところ、Jocelinに大きく後れをとることなく視野狭窄を脱し、Adamと同レベルの読み手に留まることをどうやら免れる。

畢竟なんとか「悪い読者」にならずに済んだ私たちは、自分の読書の過程が、作者Goldingによっていかに周到に画策されていたかを、痛感せずにはいられない。後にして思えば、作品の究極的ヴィジョンの予示は、作品冒頭から数カ所に仕掛けられていた、ということなのだから。

1959年までのGoldingは「作者の意図こそ作品理解にとって真正かつ最重要だ」という考えの持ち主だったが、評論家Frank Kermodeにたしなめられたことや、前作*Free Fall*に対する無理解な書評が続出したことが原因で、*The Spire*執筆の頃にはその考えを改めていた、というのがほぼ定説である(Biles 54-58; Jay 159-61; Carey 260)。だがその一方、1976年の講演録“A Moving Target”や1964年のBilesとの対談、及びJohn Haffendenとの1980年の対談などで、Goldingは、作者は意図を持って書きはじめるのだろうが、意図に

従って書いている最中は部分部分しか見えておらず、最終的完成形は作者にとって意外なものとなるので、作者は書き終わるとその意図を忘却すべきであり（もしくは書き終わるまでには意図が霧散しており）、その結果、作者自身の読みと読者の読みに優劣が無くなるのだ、というような、微妙な言い方もしている（Golding, “Moving” 166-67; Biles 56; Haffenden 108-09）。また、Haffendenとの対談では、1980年発表の小説*Rites of Passage*において自分が“conscious of having [. . .] designs on the reader, to the extent of abusing him”だったことを、ある程度認める発言も残している（Haffenden 104）。さらにまた、1962年時点においても、*Lord of the Flies*の独自解釈を述べ立てる大学生に対し、Goldingが作者としての意図と計算の深さを声高に主張する姿も記録されている（Carey 257）。Goldingは、作品の解釈権を全面的に読者に譲り渡したつもりではなさそうだ。作者の権威が劇的に揺さぶられ始めた時代にあつて、⁵ *The Spire*が見せているのは、むしろ作品の読まれ方を作者としてかっちり統制するGoldingの手綱さばきではないだろうか。

*The Spire*という小説は、まず私たちが自分の読解力に自負を持つように、案内役の「読み手」登場人物まで準備して周到に誘導し、私たちの読み行為に偏見のバイアスをかける。そうしておいたうえで次に、蒙を啓くべき意見を私たちに体験させることにより、「読み手」としての私たちの自己認識に変革を迫る。この小説は、私たちの高慢を減少させ、私たちを謙虚な読み手へと成長させる。何のことはない、私たち小説の読者はずっと、Jocelinが学ぶ読み方のレッスンと同じレッスンを——そしてAdamが落第するのと同じレッスンを——策定されたカリキュラムどおりに、受けていたのである。

註

- 1 本論文は、英国エクセター大学コーンウォール校にて開催された国際学術会議The William Golding Centenary Conferenceにおいて2011年9月17日に口頭発表した論考に、大幅な加筆を施したものである。この学術会議への参加にあたっては、平成23年度山口大学人文学部研究プロジェクト等経費より研究助成を受けた。ここに記して謝意を表したい。
- 2 Golding自身も、最初Jocelinが受けとったこのヴィジョンは真正なものだった、という見解を示している——“of course my own personal belief is that Jocelin was used to make the spire, and that his original vision was absolutely right”（Haffenden 109）。

- 3 他人の手稿を読むという手段によって他人の心の奥をはじめて理解するという構図を、Goldingは1980年の小説*Rites of Passage*でさらに大きく展開するのだが、このことを詳しく取り上げるのは他日を期すこととしたい。
- 4 宮原・吉田による邦訳書『尖塔—ザ・スパイア—』247ページの訳者注5を参照。
- 5 ただし、読書行為における読者の役割の重視と、作者の地位の失墜は、何もBarthesやMichel Foucaultの「作者の死」宣言をもって始まったわけではない。Wilhelm Dilthey流の「作者の想」回復というロマン派的解釈学を、Edmund Husserlが批判し論争となった1910年代にも、「作者の死」概念の萌芽はあった。また、ニュー・クリティシズムの“intentional fallacy”という考え方も、「作者の意図」を汲み取るタイプの読み方をはっきり否定したという点で、「作者の死」につながっていくものだった——「1920年代になって、作者からほぼ完全に絶縁された読者がはじめてはっきりと意識された。『読者』の発見である」（外山13）。1959年の対談でKermodeがGoldingを諷めるのに引き合いに出したD. H. Lawrenceの“Never trust the artist. Trust the tale. The proper function of a critic is to save the tale from the artist who created it”という言明も、1923年発表の*Studies in Classic American Literature*第1章にあったものである。1980年に編まれた名論文集*Reader-Response Criticism: From Formalism to Post-Structuralism*の序文に、編者Jane P. Tompkinsは“Reader-response criticism could be said to have started with I. A. Richards’s discussions of emotional response in the 1920s or with the work of D. W. Harding and Louise Rosenblatt in the 1930s”と書いた(Tompkins x)。1949年には、René WellekとAustin Warrenが共著*Theory of Literature*において、作品の意味を“nothing outside the mental processes of individual readers”だと捉えるアプローチのことを、“very common”な営みだと指摘するほど当たり前になっていた(Qtd. in Booth 409)。だが、作者とテキストと読者の関係論が新たな衝撃力を持って大きくなっただけになったのは1960年代終わり頃以降だった、と断じて異論はないところだろう。

引用文献

- Babb, Howard S. *The Novels of William Golding*. Columbia: Ohio State UP, 1973.
- Biles, Jack I. *Talk: Conversations with William Golding*. New York:

- Harcourt Brace, 1970.
- Booth, Wayne C. "The Limits of Pluralism: 'Preserving the Exemplar' : or, How Not to Dig Our Own Graves." *Critical Inquiry* 3.3 (1977): 407-23.
- Boyd, S. J. "'There are no foundations': *The Spire*, the Lexicon and the Interpretation of Scripture." *Fingering Netsukes*. Ed. Frédéric Regard. Saint-Étienne: Publications de l'Université de Saint-Étienne, 1995. 83-91.
- Carey, John. *William Golding: The Man Who Wrote Lord of the Flies: A Life*. London: Faber and Faber, 2009.
- Crawford, Paul. *Politics and History in William Golding: The World Turned Upside Down*. Columbia: U of Missouri P, 2002.
- Golding, William. "A Moving Target." 1976. *A Moving Target*. By Golding. London: Faber and Faber, 1982. 154-70.
- . *The Spire*. London: Faber and Faber, 1964.
- Haffenden, John. *Novelists in Interview*. London: Methuen, 1985.
- Hallissy, Margaret. "Christianity, the Pagan Past, and the Rituals of Construction in William Golding's *The Spire*." *Critique* 49.3 (2008): 319-31.
- Hodson, Leighton. *William Golding*. Edinburgh: Oliver and Boyd, 1969.
- Hynes, Samuel. *William Golding*. New York: Columbia UP, 1964.
- Jay, Betty. "The Architecture of Desire: William Golding's *The Spire*." *Literature & Theology* 20.2 (2006): 157-70.
- Johnston, Arnold. *Of Earth and Darkness: The Novels of William Golding*. Columbia: U of Missouri P, 1980.
- Kinthead-Weekes, Mark. "The Visual and the Visionary in Golding." *William Golding: The Man and His Books: A Tribute on His 75th Birthday*. Ed. John Carey. London: Faber and Faber, 1986. 64-83.
- Kinthead-Weekes, Mark, and Ian Gregor. *William Golding: A Critical Study*. 2nd ed. London: Faber and Faber, 1984.
- Tiger, Virginia. *William Golding: The Dark Fields of Discovery*. 1974. London: Marion Boyars, 1976.
- . *William Golding: The Unmoved Target*. London: Marion Boyars, 2003.

Tompkins, Jane P. “An Introduction to Reader-Response Criticism.”
Introduction. *Reader-Response Criticism: From Formalism to Post-
Structuralism*. Ed. Jane P. Tompkins. Baltimore: Johns Hopkins UP,
1980. ix-xxvi.

ウィリアム・ゴールディング. 『尖塔—ザ・スパイアー』宮原一成・吉田徹夫訳.
東京：開文社出版、2006年.

外山滋比古. 『近代読者論』. 東京：みすず書房、1969年.

